

山村住民の生活と意識

—広島県三次市作木町の事例—

秋葉 節夫

広島大学大学院総合科学研究科

The life and consciousness of inhabitants in the mountain village

Setsuo AKIBA

Studies of Civilization and Society,
Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract

In Sakugi town in Hiroshima prefecture, the depopulation and advanced aging are making progress, as a result, the rate of the family consisted of the aged is increasing. And because of increasing rate of depopulation and advanced aging, persons engaged in agriculture are decreasing, on the other hand, the combinations among inhabitants are becoming weak. But in these conditions, the combinations between the aged and the members of family who have gone out are strengthening. As a result, the reproduction of production and life in the community are consisting of the assist of this members of family who have gone out.

I はじめに

2005（平成17）年の国勢調査では、東京、神奈川などの首都圏と名古屋などの大都市部への人口の集中と地方圏の停滞、そして過疎地域の人口減少が指摘されている⁽¹⁾。もちろん、地方圏でも県庁所在地は人口を維持しているが、その他の都市や町村は人口の減少や転出超過を加速させている。そして、この点は、過疎地域に目を転じれば、人口減少＝第二次過疎化に続いて、過疎地域に留まった住民が高齢化したこと、他方では、とくに若年層が少ないことに関わっていることはいまでもない。すなわち、第一に人口の社会減とともに自然減が寄与する段階にすでに入っており、とくに後者の自然減が今後とも増大するものと見込

まれる。この点は、他面から見れば、高齢者問題の深刻化である。過疎地域の高齢者比率（65歳以上人口の比率）は2005（平成17）年で30.2%であり、全国平均の20.1%を10%上回っている。また、世帯構成でいえば、過疎地域においては一人暮らしの高齢者世帯（65歳以上の高齢者の単独世帯）と高齢者夫婦世帯（65歳以上の夫婦のみからなる世帯）の全世帯に占める割合は、全国の17.0%に対して23.7%となっており、両世帯の割合は全国のほぼ1.5倍に達しているのである⁽²⁾。こうして、扶養や介護の問題を提起している。

第二には、若年者人口（15～29歳）比率も全国の17.4%に対して13.0%と低いため、当然出生率も全国平均を下回っている⁽³⁾。この格差は拡大する傾向にあり、そうしたなかで自然減が目ま

れるようになってきているのである。そして、第三に、こうした人口減少と人口の高齢化によって集落機能の低下＝「限界集落化」⁽⁴⁾の様相も指摘されるわけである。現在では、「限界集落」はアカデミズムのなかにとどまらず、行政用語としても定着している。こうして、以上の点を踏まえるならば、かつて山本努が指摘した「過疎問題の広がり」と深まり」⁽⁵⁾は一層深刻化したといえることができるものと思われる。

それでは現在の時点での過疎化のなかで、過疎地域の家族や地域生活はどのような特徴を示しているのだろうか。鯉坂学は、1990年広島県双三郡作木村・布野村（現作木町・布野町）を対象に郵送アンケート調査による統計データを用いて、両村の過疎化・高齢化の動態を分析した。そして、とくに在村高齢者の地域生活や意識を、都市へ流出・移動していった「他出家族員」（息子や娘）との関係に注目しながら明らかにしている。この調査での重要な知見は、在村高齢者家族と「他出家族員」の緊密な結びつきであって、そのことによる在村高齢者家族の生産と生活の再生産である⁽⁶⁾。

ところで、われわれも、1998（平成10）年、双三郡作木村を対象として、鯉坂学の90年調査を踏まえてアンケート調査を実施し、その後の8年間の変化・動態を明らかにした⁽⁷⁾。そこでの調査結果によっても、基本的には90年調査の知見の重要性が明らかにされている。本稿は、この98年調査を踏まえて、09年実施のわれわれのアンケート調査と比較することで、その後さらに11年間の変化・動態を明らかにしようとして試みたものである。とくに、2004（平成16）年、作木村が他の6町村とともに三次市と合併し、作木町となって、町をとりまく環境も大きく変化している。もちろん、比較・対照が可能なように、調査項目は、98年調査を踏

襲しているが、以上のような変化・動態を明らかにする点が必要と思われるものを追加していることはいうまでもない。こうした点を念頭に置きながら、とくに在町高齢者と「他出家族員」との関係に注目をしながら、作木町の家族と地域生活の変化・動態を明らかにすることが本稿の課題となる。

II 調査対象地と調査の概要

1. 調査対象地の概況

本調査の対象地の三次市作木町は、備北地域の西端に位置しており、東南には三次市市街地、東に国道54号線が通る三次市布野町と接しており、西は江の川、北は中国山地（女亀山）を境に島根県と接している。作木町は江の川上流の清流や、中国山地の豊かな自然環境に恵まれた地域であるが、他方では、地形は急峻な溪谷であり、平野に乏しく、山間に集落を形成している。公共の交通機関は、JR三江線が江の川沿いを走っているが、1日6便しかなく、基幹集落の下作木に最も近い作木口から三次駅まで35分ほどかかる。道路は、JR三江線に沿って国道275号線が通っているが、改装率は57.4%で、車の離合の難しい個所もあり、基幹集落の下作木から三次市街地まで40分ほどかかる。しかし、東西を貫く二本の県道は改装率96.1%で、とくに下作木から便坂トンネルを抜けて国道54号線へと出ることのできる県道庄原作木線によって、三次市街地へのアクセスがしやすくなっていて、利便性は増加している。

次に、作木町の諸特徴について見てみたい。作木町の総面積は91.92平方キロメートル、そのうち林野面積が83.2%を占め、可住面積率は16.8%、そして耕地面積は5.2%にすぎず、広島県の過疎地域の平均耕地面積7.98%の65%程にすぎない。

表1 専業・兼業別農家数

（単位：戸）

年次	世帯総数	農家戸数	専・兼別農家数		
			専業	第一種兼業	第二種兼業
1985	812	603	111	87	405
1990	765	546	140	64	342
1995	745	505	165	39	301
2000	801	314	99	37	178

出典：農林業センサス各年次

表2 世帯・人口の推移 (単位：人)

年次	世帯数	人口		
		計	男	女
1985	812	2439	1182	1257
1990	765	2226	1057	1169
1995	745	2067	972	1095
2000	801	2014	965	1049
2005	697	1799	842	957

出典：国勢調査各年次

そして、当の耕地においては、大部分で稲作がおこなわれている。産業・就業の点では、住民のなかの第一次産業就業者の割合は、41.0%で、そのほとんどは農業に従事している。主要な作物は米で、その他梨は作木町の特産品として収穫をあげている。表1は、専業・兼業別農家数の割合を示している。2000年時点で農家総数314戸に対して、専業農家99戸、第一種兼業農家37戸、第二種兼業農家178戸であり、1995年までは専業農家が数字のうえでは増加していたが、2000年を境に減少している。この専業農家の実態の多くは高齢者の農家であり、農業だけでは生計を十分に立てることができないのが現実である。なお、総農家数は一貫して減少しており、農林業の停滞を見てとることができる。また、第二次産業の割合は、27.6%で、建設業と製造業に従事している人が多い。第三次産業の割合は38.0%であり、全体として第二次・第三次産業とも過疎地の平均を下回っている。

それでは人口の推移はどのようなものかを見てみたい。表2は、世帯・人口の推移を示している。これを見ると作木町の2005（平成17）年度の総人口は1799人で、内訳は男性842人、女性957人である。1995（平成7）年の人口からの減少率は13.0%で、2000年度から見ても10.7%減少している。65歳以上人口の割合、つまり高齢化率は1995年には41.07%であったのに対して2005（平成17）年には43.6%に増加している。年齢別人口の割合を広島県の過疎地平均、非過疎地平均と比較してみると、作木町の高齢化率の高さと15～29歳（非

過疎地21.92%、作木町8.22%）、30～64歳の人口の割合（非過疎地47.25%）の低下が特徴的である。表には示していないが、さらに詳しい人口コホートで見ると、65歳以上人口の割合が高く、20～24歳（2.3%）、30～34歳人口の割合（2.8%）がとくに低いのがわかる。しかし、それでも25～29歳人口は男女ともわずかながら増加傾向にあり、注目に値するといえる。

以上が、作木町の自然環境および産業構造と人口の動態の概略である。これらの点を見ると、作木町では山間の峡谷という地形もあって、町内に十分な基幹産業を発達させることができず、また、三次市街地への交通と町内での仕事が見つけにくいというところから、若者の定住が進まないのが現状である。この点は総人口の減少、高齢化率の高さに反映し、作木町の町づくりの当面の課題となっているといえる。

2. 調査の概況

まず調査については、1998年調査は、村内の有権者の4分の1（25%）を選挙人名簿から無作為抽出し、そのうち39歳未満および79歳以上の人を除外して対象者とした。2009年調査は、同じく町内有権者の4分の1（25%）を選挙人名簿から無作為抽出し、85歳以上の人を除外して対象者とした。

表3に示したように、98年調査では、有権者の25% 434人のうち、1920（大正9）年から1958（昭和33）年に生まれた342人を対象としている。09年調査は、有権者の25% 387人のうち、1924（大

表3 調査対象者と回答数及び率 (単位：人、%)

	有権者数	有権者の25%	調査対象者外数	調査対象者数	有効回答者数	回収率
1998年調査	1736	434	92	342	252	73.7
2000年調査	1547	387	29	358	221	61.7

表4 回答者の性別・年齢層

(単位：%，人)

	性別		年齢層								%
	男	女	20代	30代	40代	50代	60-64	65-69	70-78	79-85	
1998年調査	48.8 (123)	51.2 (129)	-	0.4 (1)	13.9 (35)	19.8 (50)	9.5 (24)	17.1 (43)	39.3 (99)	-	100 (252)
2009年調査	48.0 (106)	52.0 (115)	3.6 (8)	5.9 (13)	11.8 (26)	13.1 (29)	23.5 (52)	25.3 (56)	16.7 (37)		100 (221)

正13)年から1989(平成元)年に生まれた358人を対象としている。なお、調査はアンケート方式の調査票の郵送法によるもので、有効回答数および回収率は、98年調査が252人の73.7%、09年調査は221人の61.7%となっている。

次に、回答者の性別と年齢層を見てみたい。表4は、回答者の性別・年齢層を示している。98年調査と09年調査は、対象者の年齢幅が異なるので単純には比較できない。しかし、98年調査と09年調査では、男女比はほぼ等しいことがわかる。他方、年齢層では、70歳台後半の割合が相対的には高まっている。男女比についてはともかく、09年調査では高齢者比率が相当上昇しているという点については、留意が必要である。

以上のような手法で今回実施した09年調査は、先の98年調査同様、対象者を「他出家族員など家族単位のことや後継ぎの問題を明らかにするために、対象者として結婚し子供のいる可能性のある

住民」⁽⁸⁾を念頭に置きながらも、総人口の減少ということも勘案し、20歳以上85歳まで、対象者を広げている。もちろん、両調査の結果の比較をおこなうために、調査項目もできるかぎり踏襲している。しかし、住民の地域生活が98年以降11年間でどのように変化したのか、とくに在町高齢者と他出家族員との関連に焦点を絞りながら、調査結果を示してみたい。

Ⅲ 在町高齢者と他出家族員

以上の調査の結果から、作木町では、表5作木町における同居家族の形態に示すように、同居家族がすべて高齢者である高齢者家族は、36.1%から38.9%へ2.8%増加している。表には示されていないが、高齢単身者がとくに増加しているのが特徴である。他方、三世代同居家族は21.0%から15.8%へと5.2%の減少を示している。すでに98年

表5 作木町における同居家族の形態

(単位：%，人)

	1998年	2009年
高齢者のみの家族	36.1	38.9
高齢単身(高齢：男女とも65歳以上)	8.7	
高齢者家族高齢夫婦(男65女60)のみ	27.4	
高齢夫婦(男65女60)+その親		
高齢者(男女共65以上)二世代or兄弟姉妹		
壮年者中心家族	26.2	29.9
壮年単身(壮年：男女共65未満)	2.8	
高齢核家族(高齢夫婦：男65女60+35以上未婚の子)	2.8	
壮年夫婦(男65女60未満子なし)+高齢者(両親or片親)	8.7	
壮年夫婦のみ(男65女60未満)	5.6	
壮年核家族(夫婦+35歳未満未婚の子)	6.3	
三世代以上家族(含二世代とも壮年夫婦)	21.0	15.8
その他 親が高齢者or壮年の父子・母子家庭など	5.2	0.5
無回答	11.5	14.9
計	100.0	100.0
(N)	252	221

表6 他出者の数とその続柄 (2009年調査時)

他出者数	% (人)	他出者の続柄	% (人)
なし	29.4	長男	50.0
1人	18.6	次男	27.8
2人	35.3	三男以下	8.2
3人	10.0	養子	0.6
4人	2.3	長女	54.4
5人	0.9	次女	29.1
6人	0.5	三女以下	5.0
7人	0.5	養女	0.6
8人以上	0.0	その他	0.8
無回答	2.5	無回答	10.2
計	100.0	計	100.0
		(N')	(350)
(N)	(221)	(N)	(158)

注1：データは、回答者全員のもの。高齢者には限定していない。

注2：他出者の続柄は複数回答。(N') 累積実数

表7 他出家族の人数と家族形態の関係 (単位：人，%)

	なし	1人	2人	3人	4人	5人以上	計
高齢者のみの家族	14(16.9)	12(14.4)	39(47.0)	12(14.5)	4(4.8)	2(2.4)	83(100.0)
壮年者中心家族	27(42.2)	13(20.3)	18(28.1)	5(7.8)	1(1.6)	0(0.0)	64(100.0)
三世代以上家族	14(42.4)	7(21.2)	10(30.3)	2(6.1)	0(0.0)	0(0.0)	33(100.0)
計	55(30.6)	32(17.8)	67(37.2)	19(10.6)	5(2.7)	2(1.1)	180(100.0)

表8 他出家族の家族形態と帰郷回数の関係 (単位：人，%)

	年5回以上	年3～4回	年2回以下	計
高齢者のみの家族	35(50.8)	17(24.6)	17(24.6)	69(100.0)
壮年者中心家族	16(36.4)	12(27.3)	16(36.3)	44(100.0)
三世代以上家族	9(40.9)	9(40.9)	4(18.2)	22(100.0)
計	60(44.4)	38(28.2)	37(27.4)	135(100.0)

調査の時点でもそうであったように、作木町では高齢化が進行するとともに、若・壮年層の同居者のいない「高齢者のみの家族」の割合が増えつつあるといえる。

ところで、同居家族員数が減少し、「高齢者のみの家族」が増加すると、在町の高齢者は、その生活の一面を他出した子ども（他出子）、つまり他出した家族（他出家族）に頼らざるをえなくなる⁹⁾。表6は、他出者の数とその続柄を示したものである。作木町の場合には、町外他出者（ほとんどのケースは子ども¹⁰⁾）は二人以上いると答えた人が50.5%と半数を越え、その続柄を見てみると、長男、長女がそれぞれ50%を上回っている。男女の差はそれほど大きくはないが、女性の方が

2.5%ほど高い数値を示しているのがわかる。

ところで、表7は、他出家族員の人数と家族形態の関係を示したものである。これによれば、「高齢者のみの家族」の他出家族員数は、「壮年者中心家族」、「三世代以上家族」のそれに比べて多くなっている。また、「高齢者のみの家族」でも他出家族員がいない家族はあるが、おおむねは1～3人の他出家族員（14.4%、47.0%、14.5%）をかかえている家族が大部分である。

表8は、他出家族員のうち最多帰郷者（各家族ごとに最も頻繁に帰郷する他出家族員）の帰郷回数と家族形態の関係を示したものである。

この表8によれば、最多帰郷者の帰郷回数は、「高齢者のみの家族」で多いという結果がでている。

「年5回以上」帰郷する人の割合も50.8%と他の二家族に比べて高率であるのがわかる。すなわち、同居家族が高齢化している家族ほど、他出家族員数は多く、またかれらの帰郷頻度も増すわけである。過疎地域の「高齢者のみの家族」と他出家族員は、このような形態を通じて、緊密に生活維持・支援関係を維持しているのである。

他方、町内の農林業に関しては、現在、その大部分が高齢者によって担われているが、当の農林業は在町の高齢者のみによって成り立っているわけではない。すなわち、町外からの労働力、他出家族員の支援によるところが大きいのである。他出家族員が帰郷する目的・用件の第一位は、「様子を見に」(33.0%)であるが、第二位は「農業の手伝い」(24.5%)であり、それを「高齢者のみの家族」に限定するならば、60.0%にも達しているのである。

すなわち、「高齢者のみの家族」の場合には、半数以上の他出家族員が農林業を手伝うために帰郷するのである⁽¹¹⁾。したがって、こうした観点からすれば、他出家族員の存在が町内の農林業の存続に貢献している点があるわけである。

もちろん、大部分の他出家族員は町外に居住し、したがって、在町家族との間には一定の距離があるわけである。しかしながら、在町の高齢者と他出家族員の間には、以上のような交流・支援関係、あるいは親族ネットワークが成立しているのである。「この土地に住み続けていくうえで頼りになるもの」はとの質問には、高齢者層では、「他出家族員」(60～70歳未満46.0%、70～80歳未満47.1%、80歳以上55.6%)をあげ、また「高齢者のみの家族」でも「他出家族員」をあげる人は、62.4%を占めている。これは町内の親戚・隣近所の人、さらに農協・支所などを上回る数値である⁽¹²⁾。また、「日常生活の中でどんな時に生きがい・楽しみを感じますか」という質問には、「他出している家族が帰省したとき」と回答する人は全体でも55.3%にのぼっている。作木町における「高齢者のみの家族」とその他出家族員との交流・支援の関係の緊密性は、こうした山村住民の意識からもうかがえるのである。

それでは、こうした家族員が他出し、また帰郷

する理由は何かを見てみたい。もちろん、若・壮年層の他出ということは、今に始まったことではない。昔にさかのぼれば出征のためもあるし、現在では仕事のため、進学のため、あるいは都市生活へのあこがれという理由もある。作木町では、他出経験のある人は59.8%と多く、そのうち43.6%の人は「町では仕事が見つからなかった」と回答している。他の山村地域と同様に、就職や進学を機に他出する人が多いという特徴を指摘することができる。他方、この他出者が作木町に帰郷した時点での年齢は、20歳代の人が24.2%と多数を占めている。そして、この他出経験者の帰郷時期と帰郷年齢の関係をしてみると、全体として帰郷時期が早いほど帰郷時の年齢が若くなっている。これに対し、1990年代以降の帰郷者は10、20歳代はなくなり、30歳以上の人によって占められている。そして、40・50歳代の壮年者が多く、60歳代の帰郷者が多くなっていることも特徴的である。帰郷の理由では、「家の後を継がねばならなかった」(35.5%)、「老親の面倒をみるため」(20.9%)の二つを挙げる人が多い。とくに、1990(平成2)年代以降の帰郷者に限定すると、「老親の面倒をみるため」を理由としてあげる人が34人中8人(23.5%)に達している⁽¹³⁾。すなわち、近年の帰郷者はその年齢層が高くなり、その帰郷理由は、高齢となった親の面倒をみるために作木町に戻っているという特徴を示しているのである。

ところで、作木町のような山村地域では、子や孫との同居は難しいところがある。この山村地域に若・壮年層が定住し、その結果として三世代以上の同居家族を形成していくためには、雇用や労働、教育をはじめ様々な条件整備が必要である。作木町で「高齢者のみの家族」が増加し、若・壮年層が流出するのも、こうした様々な条件に恵まれていないからである。つまり三世代以上の同居家族を形成することの困難性に起因しているのである。

しかしながら、同居はできなくても、またその結果として高齢単身者や「高齢者のみの家族」が増加しつつあるとしても、そのことがただちに親と子、孫との関係が切れてしまうことを意味して

表9 他出家族員の現住所

(単位：人，%)

	1998年	2009年
三次・庄原市や旧双三郡内	64(20.8)	67(24.5)
広島市内	96(31.1)	95(34.7)
県内市部（三次・庄原・広島氏以外）	33(10.7)	30(10.9)
県内町村部（旧双三郡以外）	28(9.4)	3(1.1)
島根県	11(3.6)	7(2.6)
中国・四国地方（広島・島根県以外）	12(3.9)	10(3.6)
九州・沖縄地方	7(2.3)	5(1.8)
近畿地方	23(7.5)	29(10.6)
その他の地域	33(10.7)	28(10.2)
計	308(100)	274(100)

注1：無回答は除く。

注2：回答は複数回答による。

はいないのである。すでに見たように、作木町では、他出家族員の頻繁な帰郷という形態をとって、在町家族と他出家族員の家族とが交流し、親族ネットワークを維持しているのである。町内および町内をつなぐ道路舗装率も上昇し、また高速道路の開通によって他出家族員の帰郷が従来に比べて容易になっている現在、在町高齢者と他出家族員の交流は居住の枠を越えて広がっているのである。

若・壮年層の就業機会が多い広島市や福山市などを県内にかかえ、また高速道路網も相対的に整備されている広島県では、以上の他出家族員がこうした都市部に多く居住している。表9は、他出家族員の現住所を示したものである。この表9によると、他出家族員は、2009（平成21）年においても、「三次・庄原市や旧双三郡内」（24.5%）、「広島市」（34.7%）など帰省が比較的容易な地域に居住している⁽¹⁴⁾。雇用や労働などの関わりで同じ集落や同じ町内には居住できないが、遠くても車や電車を利用すれば数時間程度で行き来が可能な地域に他出家族員の多くが居住しているのである。こうした比較的近距離内に居住する他出家族員の存在が、山村地域の高齢者の生産と生活の再生産に大きく寄与しているのである。

IV 地域生活の変化

ここでは、作木町の地域生活の変化を見てみる。まず、農業経営の変化であるが、耕地面積では、

水田が3反未満の農家が27.1%と最も多く、次いで5反～1町未満の農家が22.8%となっている（単純集計，問41-A，以下同様）。畑は、1反未満の農家が39.3%と多数を占める。無回答も32.8%あるが、恐らくは1反未満の農家が大部分と思われる（41-B）。98年調査と比べて大きな違いはないが、全体として小規模農家の多さが目立っているといえる。耕地面積は11年間でかなりの減少とあってよく、同様に、林野面積についても1町未満の所有者がほとんどである（41-C）。

以上のような耕地面積の縮小は、農家の営農の変化をもたらししている。農業収入の比重の低下はもちろんのこと、農業関係団体への加入率も低下している。「共同生産組織（共同出荷組合など）」は、09年で4.5%と98年調査に比べて9%減少し、「農業協同組合（農協婦人部・4Hクラブなども）」も24.9%になり、12.8%低下している（18）。また、09年時点で、62.2%の農家は、今後の農業経営について、「現状のままで続ける」と回答しながら、14.0%の農家は、「経営規模を縮小する」、「やめたい」と回答している（42）。受託を請負う生産法人など一部にはあるが、全体として作木町の農業経営は小規模化の方向に向かうものと考えられる。

他方、農地については、98年調査と同様に、「先祖から受け継いだ大切な土地」とする人が62.0%おり、依然として、農地を伝統的家産として位置付ける人が多いという傾向がある。「いろいろな意味で特別な財産」という考え方は若干減少し

(17.1%から7.6%),「必要ならば処分できる不動産」という回答も若干減少している(7.5%から4.9%)。農地は農家にとって社会保障上の拠り所という意味があるが、山間部であるところから利用価値が低く、経済的には価値が低下しているという点が示されている(44)。また、農業の継続が困難となった場合の農地の処分については、「仕方がないので放置しておく」が36.8%を占めている。98年に比べて数値が減少しているが(44.8%から36.8%)、それは「無回答」の比率が増大したため(4.9%から17.8%)で、数値そのものの大きさが減少したことではないと考えられる。また、農地の「売却」を望む人は全体の7.4%にすぎないが、その売却先については、「誰でもよい」が22.5%、「集落・地区の人」が19.8%となっている(45)。98年調査と同様、「誰でもよい」の数値が高いのは、経営規模縮小による住民の農業離れの気運の拡大、また不動産としての価値の低下から、「集落・地区の人」だけには期待できない現状が生じていることに理由を求めることができる。

以上のように、作木町の農林業は、農産物価格の下落や農業後継者の不在などを反映して、他地域同様その展望は明るくはない。農業人口比率も98年調査に比べて8.2%低下し(24.5%から16.3%)ている(26)。その残った農業労働者も高齢化が避けられず、農業経営の現状維持すら難しい状況がある。すでに現在でも町内農業の大部分を高齢者が担っているのである。

しかしながら、作木町の農林業は、必ずしも在町高齢者だけによって担われているわけではない。すでに述べたように、「町外からの労働力」の存在が大きいのである。その意味で他出家族員の存在は無視できるものではない。他出家族員が帰郷する目的・用件の24.5%は「農業の手伝い」であり(31-B)、それを「高齢者のみの家族」に限定すると59.6%の数値に達するのである。したがって、こうした他出家族員の協力・支援なしには、作木町の農林業は成り立たないといっても過言ではないのである。作木町の今後の農業経営の展開には、生産法人を通じた受委託の展開など、高齢者を中心とする営農を支えるシステムの模索と同時に⁽⁴⁵⁾、他出家族員との農林業上の連携をど

のように工夫していくかを考えることが重要となるであろう。

次に、狭義の地域生活の変化について、98年調査の結果と比較しながら、11年間に、どのように変化しているかを見てみたい。とくに、集落・地区における互助機能がどの程度機能し、また、それが「他出家族員」との関係でどのような意味をもつかを見てみたい。隣近所や集落・地区内での人間関係をまず見てみると、隣近所での「日用品の貸し借り」、集落・地区での「用事の頼みあい」、農林業での「互いの助け合い」などの質問では、98年調査に比べるといずれも割合は減少している。しかし、「よくする」、「ときどきする」を合わせると、20～40%程あり、互助機能は依然として果たされているとも考えられる。全体としては、高齢化や人口減少のためにかつてに比べれば互助機能も果たしにくくなっているものと判断できる。「病気になった場合、お互いに看病すること」があるかどうかでは、前三者と異なり、「よくする」、「ときどきする」を含めても13.1%にすぎない。この場合には、隣近所や集落の助け合いではなく、家族もしくは病院などの専門機関に頼る割合が高くなっている⁽⁴⁶⁾(2, 3, 4, 5)。

他方、地域の祭りや盆踊りへの参加については、98年調査と同様、34.4%の人が「よく参加する」と回答している。過疎地の集落や自治体の機能の低下の一つの例証として、地域の祭りが維持できなくなるということはあるが、作木町の場合は、この11年間のなかでも祭りや盆踊りへの参加者は維持されている。このことは、集落の機能がある程度維持されていること、また住民が町内の行事に積極的に参加していることを示している。確かに、一方では、集落内の行事や祭りの開催が困難になっているという場合もあるが、そうであるからこそ町内行事としての祭りや盆踊りを活性化させているという側面もあるものと思われる。

集落・地区への愛着、また定住意思について質問してみると、集落・地区への愛着を「強く感じている」と回答した人は47.1%であり、「少しは感じている」と回答した人と合わせると86.5%に達する。この数字は98年調査とほぼ同じである。定住意思については、「この土地に住み続けられ

る」かと質問すると、「強く思う」47.1%、「少し思う」39.4%であり、「あまり思わない」11.3%、「思わない」1.8%となっている。定住意思は強く、土地を離れる可能性を示唆している人は10%程度である(7, 8)。そのうえで、住民がこの土地で生活していくうえで頼りにしているものは、「同居している家族」が51.1%で最も多く、「隣近所」32.9%、「町から他出している家族(子や孫)」28.5%が上位にきている。数字そのものの大きさは減少したが、98年調査と比べて大きな変化はない。住民が地域で生活をしていくうえで頼りにしているものは、同居家族のほか、他出している家族員や隣近所などであることがわかる(9)。

次に、親戚関係について見ると、「冠婚葬祭のつきあい」58.9%、「年賀状のやりとり」49.2%、「盆・正月のつきあい」39.5%、「お中元・お歳暮などを贈る」32.9%などが上位にきている。付き合いの内容は形式的なものが多く、この点は、この地域で住み続けていくうえで頼りにできるもののなかでも順位が低いことに対応している。その意味では、親戚関係が機能しているとはいえ、その内容は形式的・儀礼的要素が強いわけである(10, 11)。「年をとって、体がきかなくなったらどうしますか」という質問に対して、「老人福祉施設などに入所する」と回答した人は46.6%と最も多く、98年調査に比べて19.6%増加している。次に多いのは「同居の家族に見てもらう」で29.9%を占めている。この回答は98年調査に比べて11.8%減少している。「他出している家族のところに行って見てもらう」は5.4%で98年調査とほぼ同じ数値である。「高齢者のみの家族」が増加したことに対応して、「同居の家族に見てもらう」は減少し、「老人福祉施設などに入所する」との回答が増加

したものと考えられる」「ホームヘルパーを派遣してもらう」は98年調査と変わらず、介護保険制度の成立も十分活用されているとはいえない状況にある。表10は、住み続ける希望と体がきかなくなった場合との関係を示したものである。これを見ると、全体としては、「住み続ける」希望を「強く思う」とした人は「同居の家族に見てもらう」、「他出家族員に帰ってきてもらう」と回答する割合が相対的に高く、逆に、「あまり思わない」、「思わない」と回答した人に、「老人福祉施設などに入所する」、「他出家族員のところに行って見てもらう」と回答する割合が相対的に高くなっている。以上のところから、作木町の住民の定住条件(物的・関係的)は不十分であるため、「同居の家族にみてもらう」以外の人は、「老人福祉施設などに入所する」ことを考えているのである。

以上、アンケート調査の結果をもとに地域生活の変化を見てきた。まず、作木町では、隣近所や集落・地区内での互助機能が、減少したとはいえ、依然として維持されている。また、住民が地域で生活をしていくうえで、隣近所や集落・地区を頼りにしている割合も高いことが分かった。しかし、他方では、住民の高齢化が進み、若者も流出して人手が残らず、集落・地区によってはその機能を維持することが困難なところもある。したがって、例えば農林業の助けなどは若者がいないために人手不足となり、また高齢者の介護の問題などは隣近所同士の互助よりも家族の援助が必要になるわけである。作木町では、従来これらの機能を集落・地区内での協同と、他方では他出家族員の援助・支援によって補ってきたのである。物理的条件から、若者の町外への流出ということが避けられないものである以上、町内に残る高齢者

表10 住み続ける希望と体がきかない場合

(単位:人, %)

	同居の家族に見てもらう	他出している家族に帰ってきてもらう	他出している家族の所に行って見てもらう	老人福祉施設などに入所する	ホームヘルパーを派遣してもらう	計
強く思う	45(68.2)	4(57.1)	2(18.2)	49(47.6)	12(57.2)	112
少し思う	15(22.8)	3(43.9)	4(36.4)	35(34.0)	5(23.8)	62
あまり思わない	3(4.5)	0(0.0)	4(36.4)	13(12.6)	4(19.0)	24
思わない	3(4.5)	0(0.0)	1(9.0)	6(5.8)	0(0.0)	10
計	66(100.0)	7(100.0)	11(100.0)	103(100.0)	21(100.0)	208

にとって他出家族員との関係は非常に重要なものなのである。

V 町の現状と今後の見通し

前節では、作木町の住民と他出家族員の関係、集落・地区の互助機能などについてアンケート調査結果をもとに検討してみた。ここでは町の現状と今後の見通しについて住民がどのように考えているか、その社会意識の側面を見てみたい。

まず、「町に若者が定着しない理由」では、「働く場所がない」と回答した人が93.2%にのぼり、98年調査に比べても9.9%増加している。町内に働く場所がないことが若者の定住しない要因であることは、ほぼ住民全体の共通認識となっている。次に多いのは、「買い物や医療が不便だから」51.6%、「通勤に不便だから」48.0%、「都市部に比べて収入が少ないから」40.3%などである。働く場所、通勤の便、収入などの問題は98年調査よりも増加傾向にある。また、買い物・医療の不便が98年調査に比べて大きく増加している。もちろん、従来からカヌー公園や観光梨園など地域振興のための施策はとられてきたが、町の若者のための施設という点では十分ではないのである(13)。

次に、どのような人に移住・帰郷を望むかという質問では、「町出身の若・壮年者」と回答した人が75.1%、「町出身の定年退職者」と回答した人が40.3%、「都会の(町以外生まれの)若・壮年者」と回答した人は27.1%であった。98年調査同様、「町出身の若・壮年者」と回答した人が最も多い。しかし、98年調査と比べると、町出身の定年退職者と都会出身の定年退職者と回答する人の割合が増加している。町出身であれ、都会出身であれ、若・壮年者の移住・帰郷は難しいと考え、定年退職者に移住・帰郷を希望する人が増加している。作木町の高齢化の実態を考えて、若・壮年者に移住・帰郷してほしいが、現実にはそれが難しいので、町の存続のために、最低限、定年退職者の移住・帰郷を希望しているわけである。もちろん、過疎対策の一環として、定住住宅・若者住宅が建設されているが、それでは追いつかない人口減への対応として、定年退職者の移住・帰郷が

希望されているのであろう。

次に、「家の周りの生活環境」面で整備・改善してほしいものについて質問したところ、回答は「幹線道路の舗装・改良」24.9%、「生活道路の舗装・改良」25.3%、「バス・鉄道の増便」25.3%となっている。一番早く改良してほしいと回答した人は「幹線道路の舗装・改良」11.8%、「バス・鉄道の増便」5.9%などであった。全体として、道路の舗装・改良を求めている人は多い。もちろん、98年時点に比べて二本の県道はかなり改良されており、それが98年調査に比べて09年調査での数値の減少に反映している。それでも道路の舗装・改良は十分ではなく、それが以上の調査結果に表れているわけである。その他、回答率が高いものでは、「医療施設」20.4%、「商業施設(マーケット、ショッピングセンターなど)」20.4%となっている。全体的傾向としては、道路の舗装・整備、バス・鉄道の増便など交通の便を良くするということが最重要視されており、次いで医療施設・商業施設などの整備を求める声が多い。また、高齢化ということを反映して、「屋根の雪下ろし」18.6%、「生活道路の除雪」31.7%と切実な希望となっている(15)。また、加入している団体や組織などを質問してみると、「常会・組」と回答した人は90.5%と多く、その他では「年齢・性別による地域団体」44.3%、「宗教団体(神社氏子会、檀徒など)」36.2%などが多い。98年調査と比べると、「行政に関する団体」、「農業協同組合」、「宗教団体」などが10%程減少している。98年調査では「余暇・趣味の団体・サークル」が33.3%あったが、09年調査では、23.1%となり、同じく10%程減少している。町民の団体・組織への加入は、「常会・組」を除いて、軒並み減少している。ここにも高齢化という現象が反映しているものと考えられる(18)。

日常生活のなかでの生きがい・楽しさについて質問してみると、「良い作物ができたとき(収穫の喜び)」が46.6%と高い数値であるが、家族に関わるものとしては、「他出している家族(子や孫)が帰省してきたとき」が54.8%と最も多く、次いで「同居の家族との団らんとき」が44.8%と続いている。他には「地区の人たちと話しをすると

き」24.9%などがあり、収穫の喜びを除けば、家族や地域の人との関係のなかで生きがいや楽しみを感じていることがわかる(21)。毎日の生活のなかで不満に思っていることを質問してみると、「世の中の景気が悪い」40.7%、「収入が少ない」35.7%、「物価や税金が高すぎる」33.0%、「農作物の値段が安い」24.9%など世の中や収入そして農業不振などに関するものが多く、次いで「自分や家族の健康」23.1%であった。全体としては、自分や家族の健康について、そして景気の悪さや農業不振などの経済上の問題、「町が遠くて不便」23.1%などの過疎地であることの不便さなどを不満にあげている(22)。7・8年前に比べて生活が楽になったかどうかという質問に対しては、「楽になった(良くなった)」と回答した人は3.2%に過ぎず、「同じようなもの」41.6%、「苦しくなった(悪くなった)」47.1%となっている。98年調査に比べると、「苦しくなった(悪くなった)」が9.8%増加しているのが特徴である。全体としては、現状維持か悪くなったと感じていることがわかる(28)。

最後に、98年調査にはなかった質問であるが、三次市との合併の結果について質問した。専門的なサービス、住民の意見が市役所にうまく伝わる、生活環境整備、財政の安定について、「そう思わない」との回答が50%に達している。他方、消防・救急体制が整ったという点では、「そう思う」が35.7%を占めている。また、「三次市民という意識をもつようになった」という点でも、「そう思う」が31.2%を占めている⁽¹⁷⁾。要するに、合併により見込まれていた当初の目的は、住民にはまだ達成されたとは実感されていないわけである。もっとも、どの項目でも「どちらともいえない」との回答が30～40%を占めていて、まだ合併の効果を十分に判断しがたいと考えているところがある(16)。なお、「どのような町作りを進めていくべきか」を質問すると、「農林業を中心とした町づくり」23.1%、「工場誘致など新しい産業に力を入れた町づくり」22.6%、「長寿の町として医療や福祉を充実させる町づくり」16.7%などの回答となった。一方で農林業の振興が考えられながら、他方では、雇用の場を作り、人口を定着さ

せるために工場誘致などが考えられているわけである(17)。

以上の調査結果をもとに、98年調査と比べてみると次のような点があらためて明らかになる。すなわち、この11年間に、道路舗装・改良、公民館・教育施設・医療施設などの整備が進み、生活面・衛生面でも環境整備が進んだ。しかし、反面では高齢化・人口減少が進み、「屋根の雪下ろし」、「生活道路の除雪」なども困難になってきている。そうしたなかで、町の振興を図るために、若・壮年層の移住・帰郷を求める声が高まり、それとの関連で、道路舗装・改良、鉄道・バスの便の一層の向上、さらに若・壮年層のための施設を求める声が高まってきたのである。このアンケート調査結果からには判断できないが、三次市との合併評価にも見られるように、ある程度は改善されたと評価しながら、他方ではなお一層の改善を要求していることがわかる。

ところで、こうした要求や改善点などを見てみると、三次市あるいは広島県のレベルでは解決できない問題もある。若・壮年層の移住・帰郷は全国的な労働需要との関わりがあるし、商業施設、バス・鉄道なども民間企業の取り組み次第にかかっている。したがって、これらの問題は、都市と農村の格差の問題、農業政策などの国の施策と関わっているのである。要は地方自治体の手を越える問題でもある。しかしながら、三次市と合併し、町の活性化も市のレベルの課題にもなっているわけである。今後も住民の声を聞きながら、それをできるかぎり実現していくために、他の市町村とも連携をとりながら、地道な努力をしていくことが重要となっているといえる。

VI おわりに

以上、三次市作木町を対象とした09年調査結果の分析を示したが、最後に、この調査を通じて明らかになった点をあらためて指摘しておきたい。まず第一に、98年調査以降11年間の間に、作木町では、高齢化がなお一層進行するとともに、若・壮年者の同居者のいない「高齢者のみの家族」が増加している。しかしながら、他面では、こうし

た高齢者は、「他出家族員」にその生産や生活、なかでも農林業の多くを負っているのである。この点は、すでに述べたように、「他出家族員」の頻繁な帰郷頻度と「高齢者のみの家族」との相関が高いという点と、その帰郷の理由・目的は、「様子を見に」、「農業の手伝い」、「病気の見舞い」と生産と生活の両面に渡って見られるという点からも明らかである。したがって、若・壮年者の同居者のいない高齢者で、「他出家族員」が足繁く帰郷できない人は、日常生活を独力で維持できなければ、老人福祉施設などに入所するか、あるいは他所に居住する「他出家族員」のもとに行かざるをえないのである。09年調査結果では、「年をとって（老後）体がきかなくなったらどうしますか」という問いに、老人福祉施設などに入所するとの回答が増加しているが、「他出家族員」も依然として挙げられているのである。こうして、作木町の場合は、高齢化率の高さが在町高齢者と「他出家族員」との緊密な関係として現れているのである。他方、当の「他出家族員」の現住所は、「三次・庄原市や旧双三郡内」24.5%、「広島市」34.7%となっていて、つまりは帰郷が容易な地域に多い点は注意を要するところである。また、この点は、98年調査とほぼ同じ数値である。先行する研究においても、同様のことが指摘され、広島県だけに限られた現象ではないのである⁽¹⁸⁾。なお、「他出家族員」の作木町への移住・帰郷では、近年では、移住・帰郷する「他出家族員」の年齢が高くなっているということと、その移住・帰郷理由では、高齢になった親の扶養・介護の割合が高くなっている。もちろん、数としては33人と多くはないが、近年（平成元年以降）の特徴として注目しておくべきと思われる。

次に、第二に、地域生活の変化を見ると、作木町の場合、98年調査に比べて、数値は低くなっているが、日用品の貸し借り、集落・地区の外での用事の頼みあい、農業での助け合い、は依然とし

て見られ、地域の相互扶助機能が働いているのが理解される。この点を集落・地区との関わりで見ると次のようである。すなわち、集落・地区への愛着度では、98年調査と同様の数値である。定住意思については質問が異なるので比較はできないが、09年調査では、「あまり思わない」、「思わない」を合わせると13.1%である。数値としては小さいが、定住意思の不安定化の要因もあることは注意すべき点である。それではこの土地に住み続けていくうえで頼りにできるものはなにかといえは、「同居している家族」、「隣近所」、そして「他出家族員」となるわけである。家族以外では、「隣近所」という地縁的な基礎的關係が比較的安定しているが、98年調査と比べると数値は下がっている。他方、98年調査同様、親戚関係についても質問しているが、これらは「冠婚葬祭のつきあい」、「年賀状のやりとり」、「盆・正月のつきあい」というのが内容であり、この点は、この土地に住み続けていくうえで頼りにできるもののなかでも順位が低いことに対応している。その意味では、親戚関係が機能しているとはいえ、その内容は形式的・儀礼的なものである。むしろ、この土地に住み続けていくうえで頼りにできるもので「他出家族員」が41.2%の割合を示していることにあらためて注目すべきである。

最後に、以上の点を踏まえてみると、過疎地域の問題は、産業・雇用面での振興や若・壮年層の帰郷も当然のことながら、他所で居住する「他出家族員」や集落・地区内の地縁・血縁関係に注目をし、対策を考えていくことも重要であるといえるであろう。もちろん、人口減少や高齢化の進行は集落レベルでも違いが見られ、したがって、町全体の傾向の分析だけでは不十分であろう。その意味で、09年調査の結果は、個別の集落の事例研究をもって補われる必要がある。しかし、この点は別の課題であり、別稿を用意する必要がある。

注

(1) 過疎対策研究会編『過疎対策データブックー平成18年度版過疎対策の現況』丸井工文社、2008年、11頁。

(2) 前掲書、27頁。

(3) 前掲書、25頁。

(4) 大野晃『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会、

- 2007年, 10頁. なお, 大野は集落の状態を, 高齢化率や家族形態に着目して, 「存続集落」, 「準存続集落」, 「限界集落」に分類している.
- (5) 山本努『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣, 1996年, 22頁.
- (6) 鯉坂学「中国山地における過疎化の研究—広島県作木村・布野村を中心に」『現代社会学論集』第1号, 広島現代社会学研究会, 1992年, 22頁.
- (7) 秋葉節夫・石阪督規・桐村拓治「山村における家族と地域生活—広島県双三郡作木村の事例」『社会文化研究』第24巻, 広島大学総合科学部, 1998年, 137-195頁.
- (8) 鯉坂学, 前掲論文, 55頁.
- (9) この点では, 秋葉節夫・石阪督規・桐村拓治, 前掲論文, のほか, 宮城県七ヶ宿町を対象とした佐久間政広「山村における高齢者世帯の生活維持と村落社会—宮城県七ヶ宿町Y地区の事例」『村落社会研究』第5巻第2号, 日本村落社会学会, 1999年, 36-47頁, 京都府伊根町を対象とした鯉坂学「京都府の過疎地域における住民生活の研究—丹後半島の伊根町を事例として」『社会調査実習報告書』, 同志社大学, 2007年, 1-187頁, も同様の指摘をしている.
- (10) 作木町の場合は, 他出者のほとんどは在町家族の子ども, つまり他出子である. したがって, 他出家族とは, 他出した子ども, ならびに他出した子どもが町外で形成した家族と考えておきたい.
- (11) 「高齢者のみの家族」における「他出家族員」の帰郷目的・用件は「様子を見に」46.4%が最も多く, 以下, 「孫の顔を見せに」31.9%, 「農業の手伝いに」39.1%, 「病気の見舞いに」18.6%となっている.
- (12) 「高齢者のみの家族」の高齢者が, 「定住するうえで頼れるもの」としてあげるものは, 高率のものから順に, 「同居家族」62.4%, 「他出家族員」50.6%, 「隣近所の人」47.1%, 「民生委員・保健婦・ホームヘルパー」25.9%, 「地区・生活の組織」12.9%, などとなっている.
- (13) 1990年代以降の帰郷者が帰郷するにいたった理由は, 「老親の面倒をみる」23.5%, 以下「家の後を継ぐ」26.5%, 「定年」17.6%, 「先祖代々の家や土地があるから」26.5%などとなっている.
- (14) 山形県最上地域を広島県備北地域と比較した国民生活センターの調査では, 他出家族員の県内在住の割合は, 広島県備北地域のほうがかなり高い点を指摘している(国民生活センター編『現代日本の山村生活』時潮社, 1985年). 時期は前後するが, 現在でも作木町については同様の点を指摘できる.
- (15) 作木町では, 「株式会社わかたの村」, 「さくぎ共同利用施設組合」, 「農業産物処理加工施設組合」の三者で「さくぎ振興会」を運営し, 農地の受委託も始めている. こうした形で新たに農地保全の試みがなされている.
- (16) 佐久間は, 農村において高齢者の介護などの援助が集落においてなされない理由として, もともと農家は一戸前として, お互いに決済できる援助を取り結ぶのであり, 高齢者の介護のような一方向的な援助はもともとなされないと指摘している(佐久間, 前掲論文, 42頁). 本稿はアンケート調査による分析であるが, その観点からは, この点を支持しているといえる.
- (17) 三次市との合併についての評価では, 「そう思わない」との回答は, 「専門的なサービスが受けられるようになった」52.9%, 「住民の意見が市役所へうまく伝わっている」48.9%, 「様々な公共施設が利用でき便利になった」42.1%, 「広域的な地域づくりが進んでいる」44.3%, 「作木町の生活環境整備が進んでいる」52.0%, 「財政的な安定が得られ安心だ」61.5%となっている. 他方, 「そう思う」との回答では, 「消防・救急体制が整った」35.7%, 「三次市民という意識を持つようになった」31.2%, となっている. 「総合的に考えて三次市と合併してよかった」との回答では, 「そう思う」が16.3%, 「そう思わない」が43.4%となっていて, 全体として, 合併の狙いは浸透しているとはいいがたい.
- (18) 佐久間政広, 前掲論文, 40頁, 鯉坂学, 前掲論文, 125頁でも同様の点が指摘されている.

単純集計表（作木村（町）調査：1998年6月，2009年10月実施）

問1 あなたの住んでいる集落・地区を教えてください。

	1998年	2009年
1 伊賀和志	－	9
2 大津	－	6.8
3 森山西	－	5
4 森山中	－	5.9
5 森山東	－	4.1
6 岡三淵	－	0.5
7 大島	－	1.4
8 光守	－	4.5
9 西野	－	4.1
10 上作木	－	8.1
11 下作木上	－	11.3
12 下作木下	－	11.3
13 峠下	－	6.3
14 峠上	－	5.4
15 門田	－	5.9
16 大山	－	10.4
(N)	(－)	(221)

問2 日用品の貸し借りを隣近所ではよくしますか。

	1998年	2009年
1 よくする	7.9	2.3
2 ときどきする	31	16.7
3 あまりしない	39.3	36.7
4 まったくしない	20.2	44.3
無回答	1.6	－
(N)	(252)	(221)

問3 集落・地区の外での用事を頼み合うことがありますか。

	1998年	2009年
1 よくする	15.5	5.9
2 ときどきする	44	27.1
3 あまりしない	29.4	39.4
4 まったくない	9.9	26.7
無回答	1.2	0.9
(N)	(252)	(221)

問4 病気になった場合、お互いに看病することがありますか。

	1998年	2009年
1 よくする	10.7	0.9
2 ときどきする	16.7	12.2
3 あまりしない	40.4	38
4 まったくない	29.4	47.5
無回答	2.8	1.4
(N)	(252)	(221)

問5 農林業ではお互いに助け合いますか。

	1998年	2009年
1 よく助け合う	10.3	8.2
2 ときどき助け合う	37.8	38.5
3 あまり助け合わない	34.1	24.4
4 まったく助け合わない	11.5	26.2
無回答	6.3	2.7
(N)	(252)	(221)

問6 あなたは地域の祭り（神楽）や盆踊りに行かれますか。（いくつでもお答えください。）

	1998年	2009年
1 お世話したことがある	35.7	36.7
2 よく参加する（踊る・舞う）	36.1	34.4
3 たまに参加する	30.6	35.3
4 よく見に行く	40.1	25.3
5 いったことがない	4	5.4
6 祭りなどない	0.4	0.4
無回答	—	—
(N)	(252)	(221)

問7 あなたは今住んでいる集落・地区に愛着を感じておられますか。

	1998年	2009年
1 強く感じている	58.3	47.1
2 少しは感じている	29.4	37.4
3 あまり感じていない	8.3	11.3
4 ほとんど感じていない	0.8	1.8
無回答	0.8	0.4
(N)	(252)	(221)

問8 あなたは、この土地に住み続けられますか。

	1998年	2009年
1 強く思う	—	47.1
2 少し思う	—	37.4
3 あまり思わない	—	11.3
4 思わない	—	1.8
無回答	—	0.4
(N)	(—)	(221)

問9 あなたがこの土地に住み続けていく上で、頼りにできると思われるのは次のうちどれですか。（3つまでお選びください。）

	1998年	2009年
1 同居している家族	68.7	73.8
2 本家・分家や「かな親」	4.8	7.7
3 町内の家族（子や孫）	9.1	10.9
4 町内の親戚	17.9	15.8
5 町から他出している家族（子や孫）	43.7	41.2
6 隣近所の人	49.6	47.5
7 集落・地区の組織	29	16.7
8 農協	2.8	5
9 支所（支所の職員）	6	6.3
10 上記以外の人（民政委員、保健婦、ホームヘルパーなど）	12.3	17.6
11 頼りになるものがない	2.8	4.1
12 その他	2.4	2.3
無回答	0.4	0.5
(N)	(252)	(221)

問10 あなたのお宅には親戚はいらっしゃいますか。

	1998年	2009年
1 同じ集落・地区内にいる	48.4	29
2 町内にいる	62.3	31.6
3 町外にいる	77.8	32.6
4 親戚はいない	1.2	4.5
5 わからない	0.4	0.5
無回答	0.4	1.8
(N)	(252)	(221)

問11 お宅では親戚同士の付き合いとしてどんなことをしますか。している付き合いすべてに○印をしてください。

	1998年	2009年
1 盆・正月のつきあい	32.5	57
2 冠婚葬祭のつきあい	53.6	85.1
3 忙しい時の手伝い	16.3	26.7
4 困った時の相談	25.4	40.3
5 病気やけがの時に介護をする	13.9	20.8
6 日常茶飯事までお互い助け合う	6.7	10.4
7 お中元・お歳暮などを贈る	26.6	47.5
8 年賀状のやりとり	11.5	71
9 特につきあいはない	8.7	5
10 親戚はいない	11.1	0.9
11 その他	2.4	1.4
無回答	0.4	0.3
(N)	(252)	(221)

問12 年をとって（老後）、体がきかなくなったらどうしますか。

	1998年	2009年
1 同居の家族にみてもらう	41.7	29.9
2 他出している家族に帰ってきてもらう	8.7	2.7
3 他出している家族のところに行ってもらう	5.2	5.4
4 近所の知り合いにみてもらう	0	0
5 老人福祉施設などに入所する	27	46.6
6 ホームヘルパーを派遣してもらう	9.1	9
無回答	4.4	6.4
(N)	(252)	(221)

問13 あなたは、あなたの町に若者が定着しない理由は何だと思えますか。

	1998年	2009年
1 田舎で活気に乏しいから	14.7	31.2
2 人情・人間関係になじめないから	1.6	14.9
3 働く場所がないから	83.3	93.2
4 通勤に不便だから	22.6	48
5 買い物や医療が不便だから	9.5	51.6
6 住環境に問題があるから	6.3	10.9
7 物価が高いから	1.2	7.7
8 娯楽がないから	5.6	34
9 結婚相手が求めにくいから	22.2	34.8
10 都市部に比べて収入が少ないから	13.1	40.3
11 カルチャークラブなど、各種サークルが乏しいから	0.8	5
12 若者が活動できる施設が少ないから	14.3	24.4
13 親からの職業を継ぐのがつらいから	5.2	14.5
14 その他	5.2	4
無回答	0.4	0.3
(N)	(252)	(221)

問14 あなたの町の人口を増やす（或は減少をとめる）ために、若・壮年者の定住をはかると共に、どのような人に移住・帰郷してもらうことを望みますか。2つまでお選びください。

	1998年	2009年
1 町出身の若・壮年者	79.4	75.1
2 町以外の定年退職者	36.9	40.3
3 都会の（町以外の生まれの）若・壮年者	35.3	27.1
4 都会の（町以外の生まれの）定年退職者	7.5	16.3
5 その他	3.2	2.7
無回答	0.4	5.4
(N)	(252)	(221)

問15 あなたは家の周りの生活環境面で、市や県・国などに整備・改善してもらいたいと思っていることがありますか。改善してもらいたいもの全部に○印をし、その中で一番早くしてもらいたいもの1つだけに◎印をしてください。

	1998年		2009年	
	◎	○	◎	○
1 幹線道路の舗装・改良	22.6	44.8	11.8	24.9
2 生活道路の舗装・改良	6	32.1	4.1	25.3
3 農道の舗装・改良	0.8	15.1	1.4	8.6
4 林道の舗装・改良	1.2	15.1	0.9	7.7
5 バス・鉄道の増便	4	27.4	5.9	25.3
6 河川の改修	0.4	13.1	1.8	7.7
7 農業用水の整備	0.4	10.7	1.8	11.8
8 飲料水・上水道の整備・改善	3.6	13.9	4.5	15.8
9 消防・街灯の整備	0.4	9.9	1.8	14
10 公民館・集会所の設置	2.4	13.1	—	1.8
11 公園・子どもの遊び場	0.4	13.1	1.4	10
12 教育施設（幼稚園・小学校など）の設置	0.4	6.7	—	1.8
13 医療施設	2.8	18.3	2.7	20.4
14 児童福祉施設（保育所など）	0	4	—	4.1
15 文化・スポーツ施設	0.8	21	0.5	4.5
16 商業施設（マーケット・ショッピングセンターなど）	0.8	20.2	4.5	20.4
17 交通安全施設（カーブミラーなど）	0.8	9.9	1.8	10.9
18 ごみ処理・収集	2	21	0.5	5.4
19 し尿処理	2.4	19.4	0.9	3.2
20 家庭排水の処理	2.8	18.7	0.5	6.3
21 屋根の雪下ろし	0.4	8.3	1.8	18.6
22 生活道路の除雪	0.8	21.4	4.1	31.7
23 その他	2.4	7.1	8.2	5.4
24 特になし	0	2.4	—	6.3
無回答	—	0.4	44.3	6.8
(N)	(—)	(252)	(221)	(221)

問16 作木村は2004年3月三次市と合併しました。この合併によって、次のような事柄はどうなったでしょうか。

	2009年		
	そう思う	そう思わない	どちらとも言えない
1 専門的なサービスが受けられるようになった	11.3	52.9	30.3
2 住民の意見が市役所のうまく伝わっている	7.6	48.9	39.8
3 様々な公共施設が利用できるようになり便利になった	18.1	42.1	34.8
4 消防・救急体制が整った	35.7	31.2	32.1
5 広域的な地域づくりが進んでいる	12.2	44.3	41.2
6 作木町の生活環境整備が進んでいる	11.3	52	35.3
7 財政的な安定が得られ安心だ	3.2	61.5	33
8 職員数が減って行政サービスが低下した	45.2	21.3	30.8
9 三次市民という意識を持つようになった	31.2	34.9	33
10 総合的に考えて三次市と合併してよかった	16.3	43	39.8
(N)	(221)	(221)	(221)

問17 作木町がよい地域として発展していくために、どのような町づくりを進めていくべきだとお考えですか。

	1998年	2009年
1 農林業を中心とした町づくり	—	23.1
2 カヌー公園など観光業を中心とした町づくり	—	12.7
3 工場の誘致など、新しい産業に力を入れた町づくり	—	22.6
4 スーパーの誘致など、商業を中心とした町づくり	—	5.9
5 三次市の中心部への通勤者の住宅地（ベットタウン）として発展させる町づくり	—	11.3
6 長寿の町として医療や福祉を充実させる町づくり	—	16.7
7 その他	—	0.9
無回答	—	0.8
(N)	(—)	(221)

問18 あなた或はお宅で現在、加入したり参加しておられる団体や組織は、次のうちどれでしょうか。（いくつでもお答えください。）

	1998年	2009年
1 集落・地区の組織（常会・組など）	84.5	90.5
2 年齢・性別による地域団体（婦人会・老人会・青年会・PTAなど）	56.3	44.3
3 行政に関する団体（防犯協会・納税組合、消防団、民生、児童委員会）	32.9	22.2
4 共同生産組織（共同出荷組織など）	13.5	11.8
5 農業協同組合（農協婦人会、4Hクラブなども）	37.7	24.5
6 宗教団体（神社氏子会、檀徒会など）	44.4	36.2
7 講など	3.6	3.2
8 余暇、趣味の団体・サークル	33.3	23.1
9 住民運動団体（過疎を逆手に取る会など）	2.8	2.3
10 労働組合	5.6	5.4
11 政党、政治家後援会	12.7	8.6
12 その他	2	3.2
無回答	0.4	4.5
(N)	(252)	(221)

問19 あなたの現在の健康状態はいかがですか。

	1998年	2009年
1 よい	—	16.7
2 まあよい	—	19
3 ふつう	—	36.2
4 あまりよくない	—	21.7
5 よくない	—	5.4
無回答	—	0.9
(N)	(—)	(221)

問20 あなたは現在、定期的に通院していますか。

	1998年	2009年
1 作木町内の診療所に通っている	—	21.3
2 三次市内（作木町外）の病院に通っている	—	26.7
3 三次市外の病院に通っている	—	10.9
4 通院はしていない	—	35.7
無回答	—	5.4
(N)	(—)	(221)

問21 あなたは日常生活の中でどんな時に生きがい・楽しさを感じますか。（いくつでもお選びください。）

	1998年	2009年
1 よい作物ができた時（収穫の喜び）	65.5	46.6
2 勤め先で仕事がうまくいった時	23.8	24.9
3 地区の人たちと話しをする時	51.6	39.8
4 地区の人たちとレクリエーション・スポーツなどをする時	32.9	23.5
5 同居の家族と団らんの時	43.3	44.8
6 他出している家族（子や孫）が帰省してきた時	67.5	54.8
7 趣味を楽しんでいる時	46.4	39.3
8 テレビを見ている時	28.6	33.9
9 読書をしている時	20.6	18.6
10 その他	6	6.3
無回答	0.4	0.9
(N)	(252)	(221)

問22 あなたの毎日の生活で何か不満に思っていることはありますか。不満に思うものすべてに○印をし、その中で特に不満に思うものの1つに◎印をしてください。

	1998年		2009年	
	◎	○	◎	○
1 自分や家族の健康	7.9	29	5.9	23.1
2 自由になる時間が少ない	1.2	11.5	2.3	14
3 収入が少ない	6.7	34.9	6.8	35.7
4 物価や税金が高すぎる	4.8	40.5	6.8	33
5 世の中の景気が悪い	5.6	39.3	5.9	40.7
6 家が古く不便	0.8	15.9	1.8	12.2
7 農作物の値段が安い	4.8	30.2	4.5	24.9
8 町が遠くて生活が不便	1.2	25.4	2.3	23.1
9 子どもの教育に不便	0.8	10.7	0.9	5
10 あとつぎが決まっていない	2	12.7	2.7	13.6
11 子どもと一緒に暮らせない	1.6	16.7	0	7.2
12 働く場所がない	0	9.5	1.3	9
13 仕事がきつい	0.4	7.1	0	4.5
14 家族・親戚の人間関係	0.4	5.6	0.9	4.5
15 近所の人間関係	1.6	8.3	0.5	9.5
16 組合、団体、グループの運営や人間関係	0	3.2	0.9	3.2
17 特になし	0	9.1	0.9	10.9
18 その他	1.6	3.2	0.5	3.6
無回答	—	0.4	—	3.2
(N)	(—)	(252)	(221)	(221)

問23 あなたの性別を教えてください。

	2009年
1 男性	48.2
2 女性	51.8
(N)	(218)

問24 あなたは何歳ですか。

	2009年
1 20歳～30歳未満	3.6
2 30歳～40歳未満	5.9
3 40歳～50歳未満	11.8
4 50歳～60歳未満	13.1
5 60歳～70歳未満	23.5
6 70歳～80歳未満	25.3
7 80歳以上	16.7
無回答	0
(N)	(221)

問25 あなたのお生まれはどこでしょう。

	1998年	2009年
1 あなたの集落・地区	33.3	34.5
2 あなたの町（作木町）の内	26.7	25.5
3 三次市・庄原市や旧双三郡内（作木町を除く）	6.3	10
4 広島県	10.7	9.5
5 島根県	7.5	10.9
6 中国・四国地方（広島・島根県以外）	1.2	3.2
7 九州・沖縄地方	1.6	0.5
8 近畿地方	0	2.3
9 その他	2.8	1.8
無回答	9.5	1.8
(N)	(252)	(220)

問26 あなたの現在のお仕事は何でしょうか（主なものを一つお答えください）。

	1998年	2009年
【経営者・自営業者】		
1 農林水産業	24.5	16.3
2 鉱工業・建設業	6.3	0.5
3 商・サービス業・自由業	4.8	4.5
【被備者（勤め人）】		
4 管理職（局長・部長・課長・所長・校長など）	4	0.9
5 専門的・技術的職業（研究者，教員，技術者など）	3.2	7.7
6 事務的職業（事務員など）	3.6	6.8
7 技能的職業（運転手，守衛，修理工，大工など）	4.8	5.4
8 販売・サービスの職業	0.4	4.1
9 労務職（現業労働従事者）	9.5	—
【家庭従業者，パート，臨時】		
10 農林水産業	3.2	4.1
11 鉱工業・建設業	0.4	—
12 商・サービス業・自由業	1.6	5
13 主婦	15.1	17.6
14 無職	9.9	20.8
無回答	8.7	6.3
(N)	(252)	(221)

問27 お差支えがなければ、お宅（世帯）の年間総収入を教えてください。

	1998年	2009年
1 ～100万円	－	9
2 100～200万円	－	10.9
3 200～300万円	－	16.8
4 300～400万円	－	8.2
5 400～500万円	－	8.6
6 500～600万円	－	6.8
7 600～700万円	－	2.7
8 700～800万円	－	3.6
9 800～900万円	－	4.1
10 1000～1500万円	－	2.7
11 1500万円～	－	0.5
無回答	－	25.9
(N)	(－)	(220)

問28 7, 8年前と比べて、生活は楽になりましたか。それとも苦しくなりましたか。

	1998年	2009年
1 楽になった（よくなった）	4.8	3.2
2 同じようなもの	46.4	41.6
3 苦しくなった（悪くなった）	37.3	47.1
4 わからない	2	5.4
無回答	9.5	2.7
(N)	(252)	(221)

問29 同居しているご家族が何人ですか。

A. 同居人数

	1998年	2009年
1 1人	10.3	10.4
2 2人	36.8	33.9
3 3人	17.5	19.5
4 4人	10.7	11.8
5 5人	8.3	7.7
6 6人	3.6	6.8
7 7人	5.6	3.2
8 8人	2.4	2.7
無回答	4.8	4.1
(N)	(252)	(221)

B. 家族形態

	1998年	2009年
1 高齢者のみの家族	－	38.9
2 壮年者中心家族	－	30.3
3 三世代以上家族	－	15.8
無回答	－	14.9
(N)	(－)	(221)

C. 20, 30, 40代の青・壮年者の有無

	1998年	2009年
1 いる	37.7	44.8
2 いない	49.2	47.5
無回答	13.1	7.7
(N)	(252)	(221)

D. 就業者数（収入を得ている人：家族従業者も含む）

	1998年	2009年
1 なし	11.5	23.1
2 1人	30.2	24.4
3 2人	24.2	25.8
4 3人	8.3	10.9
5 4人	4.8	5.4
6 5人	0.4	1.4
7 6人	-	0.5
8 7人	-	-
9 8人	-	-
無回答	20.6	8.6
(N)	(252)	(221)

問30 他出家族員（息子さんと娘さん）は何人ですか。

A. 他出家族員数

	1998年	2009年
1 なし	8.7	29.4
2 1人	21.9	18.6
3 2人	32.6	35.3
4 3人	19	10
5 4人	7.1	2.3
6 5人	1.2	0.9
7 6人	0	0.5
8 7人	0.4	0.5
9 8人	0	-
無回答	9.1	2.7
(N)	(252)	(221)

B. 他出者の続き柄

	1998年	2009年
1 長男	55.2	42.9
2 次男	21	23.9
3 三男	4.4	7.6
4 長女	58.3	46.7
5 次女	25.4	25
6 三女	7.1	4.9
無回答	4.6	5.4
(N')	(457)	(319)
(N)	(207)	(184)

C. 他出者の現住所

	1998年	2009年
1 三次・庄原市や旧双三郡内	14	21
2 広島市内	21.1	29.7
3 県内市部（三次・庄原・広島市以外）	7.2	9.4
4 県内町村部（旧双三郡以外）	6.3	0.9
5 島根県	2.4	2.2
6 中国・四国地方（広島県・島根県以外）	2.6	3.1
7 九州・沖縄地方	1.5	1.5
8 近畿地方	5	9.1
9 その他	7.2	10.7
無回答	32.7	20.6
(N')	(457)	(319)

D. 他出者の職業

	1998年	2009年
1 農業	1.3	1.5
2 自営業・経営業者	2.6	5.9
3 民間被雇用者	19.7	32.5
4 公務員・教員	5.7	11.5
5 パート・臨時家族従業者	1.8	5.9
6 主婦・家事手伝い	7	12.5
7 学生	3.1	5.6
8 看護師	2	6.3
9 無職	0.4	2.6
無回答	56.4	22.6
(N')	(457)	(319)

問31 これらの他出家族員はお宅に年間どのくらい、どんな用事で帰ってこられますか。

A. 回数

	1998年	2009年
1 よく帰ってくる (5回以上)	23.4	22.6
2 ちょくちょく (3～4回)	20.1	13.8
3 盆と正月 (2回)	15.8	7.2
4 1年に1回くらい	4.4	5.6
5 ほとんど帰らない	2.4	0.3
6 その他	0.9	0.6
無回答	33	50.5
(N')	(457)	(319)

B. 帰郷の要件 (いくつでも)

	1998年	2009年
1 農業の手伝いに	26.6	24.5
2 様子を見に	41.3	33
3 病気の見舞に	7.5	4.3
4 孫の顔を見せに	—	23.2
5 その他	14.7	15
無回答	—	11.2
(N')	(457)	(319)

C. 対象者の世帯における最多帰郷者野帰郷回数の分布

	1998年	2009年
1 よく帰ってくる (5回以上)	52.5	54.3
2 ちょくちょく (3～4回)	28	25.8
3 盆と正月 (2回)	14	13.2
4 1年に1回くらい	3	5.3
5 ほとんど帰らない	1.5	0.7
6 その他	1	0.7
無回答	—	—
(N'')	(200)	(151)

注：N''=回答を得た他出家族員の内では在村家族から見て最も多く帰郷している人

問32 将来あなたは、お子さんとどのような住まい方をしたいと考えていますか。

	1998年	2009年
1 同居したい（これからも同居続けたい）	30.5	29.4
2 同一敷地内の別の住宅に住みたい	9.1	8.6
3 同じ集落・地区に住みたい	5.2	3.2
4 少し離れて住みたい（作木町などの範囲に）	4.8	5.9
5 遠く離れて住むつもり（同じ市や町域ではなく）	13.9	5
6 分からない	22.2	30.8
7 子どもははいない	0	5.4
無回答	14.3	11.8
(N)	(252)	(221)

問33 現実として、お子さんは後を継がれますか。

	1998年	2009年
1 すでに後を継いでいる	19.8	11.2
2 将来、後を継ぐ予定である	21	23.4
3 後を継ぐかどうか分からない	15.9	30.2
4 後を継がないだろう	18.3	24.9
無回答	19.3	10.2
(N)	(252)	(205)

問34 もし、あなたやあなたのご家族全員が町外に引っ越すことになったとしたら家や土地をどのようにしたいですか。

	1998年	2009年
1 適当な人に貸したい	—	7.3
2 親戚など知り合いに貸したい	—	3.2
3 廃屋になってもそのまましておきたい	—	11.4
4 年数回、宿がわりに使いたい	—	39.3
5 家を取り壊して土地だけそのままにしておきたい	—	3.2
6 土地ごと売りたい	—	7.8
7 その他	—	13.2
無回答	—	14.6
(N)	(—)	(219)

問35 他出経験についてお聞きします。何年ぐらい村を出ておられましたか。（合計してください）

	1998年	2009年
1 他出したことはない	27.8	34.2
2 5年くらい出ていた	19.8	15.1
3 10年くらい出ていた	9.5	11.9
4 15年くらい出ていた	3.6	4.1
5 20年くらい出ていた	4.8	3.2
6 25年くらい出ていた	4.4	0.5
7 30年くらい出ていた	—	5
無回答	30.1	26
(N)	(252)	(219)

問36 他出経験のある方にお聞きします。なぜ村をでられたのですか。

	1998年	2009年
1 経済的に苦しかったので	8.2	10
2 町では仕事が見つからなかった	29.1	30.3
3 都会生活にあこがれた	6.6	10.3
4 出世をしたいと思った	1.1	2
5 進学のため	7.1	22.1
6 結婚のため	3.3	5.5
7 出征のため	4.4	3.4
8 子どもの教育のため	2.7	3.4
9 出て行くのが当たり前だったので	9.9	11
非該当	7.1	2
無回答	20.3	30.3
(N)	(182)	(145)

問37 他出経験のある方にお尋ねします。町にいつ頃戻ってこられましたか。

A. 何歳ぐらいの頃ですか。

	1998年	2009年
1 10代	6.6	9.3
2 20代	27.5	24.2
3 30代	11	13
4 40代	6.6	3.1
5 50代	4.9	3.1
6 60代	1.6	6.8
非該当	0.5	0.6
無回答	41.3	40
(N)	(182)	(161)

B. 何年頃ですか。

	1998年	2009年
1 ~ 1949年	11.5	6.4
2 1950年代	4.4	1.9
3 1960年代	11	6.4
4 1970年代	8.8	13.5
5 1980年代	10.4	9.6
6 1990年代	-	13.5
7 2000年~	-	8.3
無回答	53.9	40.4
(N)	(182)	(161)

問38 他出経験のある方にお尋ねします。どうゆう理由で町にもどってこられましたか。主なものを2つお答えください。

	1998年	2009年
1 定年になったので	2.7	5.9
2 家の後を継がねばならなかった	24.7	25.5
3 老親の面倒をみるため	19.2	20.9
4 生まれ故郷に帰りたかったから	5.5	10.5
5 老後は町で暮らしたかったから	1.6	0.6
6 先祖代々の家や土地があるから	4.9	10.5
7 親や兄弟姉妹が町にいるので	6.6	3.3
8 金銭に困ったので	0	1.3
9 都会生活に合わなかった	1.1	5.2
10 失業した	1.6	2
11 仕事上の失敗をしたため	0	0.6
12 病気になった	1.1	3.9
13 その他	12.1	9.8
無回答	47.8	36.7
(N)	(182)	(153)

問39 他出経験のある方にお聞きします。他出先でどのような仕事につきましたか。主なものを一つお答えください。

	1998年	2009年
【経営者・自営業者】		
1 農林水産業	0.5	0.7
2 鉱工業・建設業	6	2.6
3 商・サービス業・自由業	2.7	4.6
【被備者（勤め人）】		
4 管理職（局長・部長・課長・所長・校長など）	1.1	2.6
5 専門的・技術的職業（研究者、教員、技術者など）	4.4	14.5
6 事務的職業（事務員など）	5.5	4.6
7 技能的職業（運転手、守衛、修理工、大工など）	9.4	11.2
8 販売・サービスの職業	3.8	7.9
9 労務職（現業労働従事者）	7.8	4.6
【家庭従業者、パート、臨時】		
10 農林水産業	0	0.7
11 鉱工業・建設業	1.1	-
12 商・サービス業・自由業	0.5	2
13 主婦	5.5	3.3
14 無職	3.8	6.6
無回答	47.9	34.2
(N)	(182)	(152)

問40 あなたのお宅では農業を行っていますか。

	1998年	2009年
1 行っている	-	76.1
2 行っていない	-	23.4
無回答	-	0.5
(N)	(-)	(201)

問41 耕地面積はどのくらいですか.

A. 水田

	1998年	2009年
1 0a	5.5	2.7
2 30a未満	27.6	27.1
3 30～50a未満	36.3	16.9
4 50～100a未満	20.1	22.8
5 100～200a未満	4.5	3.8
6 200～300a未満	0.5	-
7 300～400a未満	0.5	0.5
8 500a以上	0	1.1
無回答	5	25.1
(N)	(199)	(138)

B. 畑

	1998年	2009年
1 0a	5.5	3.3
2 10a未満	56.8	39.3
3 10～30a未満	17.6	16.4
4 30～50a未満	3.5	4.9
5 50～100a未満	2.5	1.1
6 100～200a未満	1	0.5
7 200～300a未満	0	-
8 300～500a未満	0	-
9 500a以上	1	1.6
無回答	12.1	20.8
(N)	(199)	(183)

C. 林野

	1998年	2009年
1 0a	11.5	4.9
2 10a未満	7	19.7
3 10a～1ha未満	22.7	5.5
4 1～5ha未満	21.6	6
5 5～20ha未満	16.1	6.6
6 20～50ha未満	6	5.5
7 50ha以上	0.5	2.7
無回答	14.6	32.8
(N)	(199)	(183)

問42 あなたのお宅では今後農業経営についてどのようにお考えですか.

	1998年	2009年
1 経営規模を拡大し農業に専念する	4	0.5
2 現状のままで続ける	59.9	62.2
3 経営規模を縮小する	18.6	8.1
4 辞めたい	8	10.8
5 その他	6	3.2
無回答	5.5	15.1
(N)	(199)	(185)

問43 圃場整備についてお尋ねします。お宅では圃場整備をしておりますか。

	1998年	2009年
1 すでにしている	48.3	53
2 現在整備中	3.5	1.6
3 今後整備する予定	2.5	—
4 今後もしないつもり	22.1	15.8
5 分からない	16.6	15.3
無回答	7	14.2
(N)	(199)	(183)

問44 お宅の農地についてのあなたのお考えは、次のうちどれにちかいですか。

	1998年	2009年
1 先祖から受け継いだ大切な土地	63.8	62
2 いろいろな意味での特別な財産	17.1	7.6
3 必要ならば処分できる不動産	7.5	4.9
4 働く場所	11.6	8.7
5 その他		1.6
無回答	0	15.2
(N)	(199)	(184)

問45 仮に農地を売るとしたらだれに売りますか。(1つお選びください)

	1998年	2009年
1 集落・地区の人	20.6	19.8
2 町(作木町)内の人	12.1	8.8
3 親戚の人	12.1	8.2
4 知人・友人	5	2.7
5 だれでもよい	29	22.5
6 その他	10.6	14.3
無回答	10.6	23.6
(N)	(199)	(182)

問46 お宅で農業が続けられなくなった時、農地をどうしますか。

	1998年	2009年
1 誰かに貸す	36.7	29.4
2 誰かに売ってしまう	5.5	7.4
3 仕方がないので放置しておく	44.8	36.8
4 その他	8.5	8.6
無回答	4.5	17.8
(N)	(199)	(163)